

令和3年度 学校評価総括表 伊丹市立伊丹小学校							
教育目標		徳・知・体の調和のとれた心豊かなたくましい子の育成					
重点項目		1. 人間尊重の精神を培い、心豊かな生活実践に努める態度を養う。 2. 基礎的・基本的な知識技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決する能力を育む。 3. 命を尊び、心や体を鍛え、たくましく生き抜く力を培う。					
項目	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校運営協議会委員評価
基礎・基本の徹底と授業改善	基礎的・基本的な知識技能を習得する	・伊小タイムで反復練習により既習内容の定着を図る。 ・1学期、2学期に実施しているチェックテストを継続し、課題を明確にし、素早く対応する。 ・1学期、2学期に国語(ことばに関する)チェックテストを実施し、課題を明確にする。 ・家庭学習での漢字や計算の練習量を増やす。	・1学期、2学期に実施し、傾向を図るとともに、課題を明確にする。 ・1学期、2学期に実施し、傾向を図るとともに、課題を明確にする。	A	・今後は、チェックテストの分析とも関連させて、より効果的な内容にしていく必要がある。 ・各学年ともに、1～2学期の学習の様子から感じられた課題となる問題をチェックテストに取り入れることができた。分析することで1～6年生の系統的な課題が見えてきた。しかし、例年同じ課題が学がってきているため、テストの内容や対応策を検討していく必要がある。 ・1～2学期の内容の国語のチェックテストを実施できた。系統的な課題が見えてきたため、来年度の学習に生かす。例年と同じ課題が学がってきているため、対応策を検討していく必要がある。 ・学年に応じた練習量を家庭学習として出すことができた。のびのびプリントを職員室前に設置したことで、復習するためにプリントを自主的に取る児童の姿が見られた。	・既習内容の定着を図るため、各学年で計画的かつ段階的に取り組む。 ・チェックテストの結果分析により明確になった課題に対して、「課題と対応策」を各学年ごとに文書にまとめる。その教師も各学年の「課題と対応策」を共通理解し、来年度の児童へ生かしていく。 ・今年度の課題をふまえて、伊小タイムの取り組みを継続するとともに、チェックテストの内容、仕方についても検討していく。 ・「量」と「継続」を意識し、家庭への啓発を図る。	丁寧な基礎学力の定着を確認して対策をしていることは非常に大切なことだと思う。継続することが大切であると思う。子どもたちが将来自信をもって生きることが出来る力を育てるために、愛情をもって学校全体で取り組んでほしい。
	研究テーマの実現に向けた授業づくりを進め、その成果を発信する。	・子どもが主体性を発揮・伸張できるように明確な「めあて」を考え、子どもたちと共有する。 ・各研究授業を通して、自分の思考の深まりを実感し主体性を発揮できる「めあて」の方法を検討し、日々の実践に取り入れる。 ・一人一実践を通して、子どもの主体性を高める手立てについて見識を深める。	・各研究授業を通して、自分の思考の深まりを実感し主体性を発揮できる「めあて」の方法を検討し、日々の実践に取り入れる。 ・一人一実践を通して、子どもの主体性を高める手立てについて見識を深める。	A	・研究授業等の実践を通して、子どもの課題意識に基づいた1時間の授業の「めあて」や「到達点」を子どもたちと共有する場を開発し、日々の実践に活かすことができた。 ・ICT機器の効果的な活用について検討し、有効な手立てを講ずることができた。 ・めあてやふりかえりに焦点を当てて、研究を進めてきたが、テーマが広く、職員での研究テーマの共有が十分にできなかった。	・常に子どもたちが主体性を発揮できるような単元計画や言語活動について検討する。 ・効果的な活用の実践を今後も校内で共有していく。 ・明確なめあての提示とふりかえりの観点について研究してきたことを継続実践しつつ、学びたいと思える授業づくりについて研究を推進する。	子どもが主体的に学びたいと思いい、やっよかった。力が自信が持てたと思えるような学習になるように、地域の施設や人材もどんどん活用してほしい。
思考力・判断力・表現力の育成	読書活動を充実させ、読書力を高める。	・学校図書館の読書環境や学習環境を整え、読書の日、図書時間の活用などで、読書活動の時間を確保するとともに、読書カードを作成し、記録していくことで、読書への意欲を高める。 ・図書委員会の活動や図書ボランティア「ビッド」さんの活動の中に、読み聞かせやおすそめの本の紹介、季節に合わせた掲示物の制作、「読書週間」の取り組み等を入れることで、読書の推進を図る。 ・感染対策として、以下の点を徹底させる。 ① 図書の時間を2週間1回の利用とし、2部屋に分かれて使う。② プレイタイムの利用は、偶数学年と奇数学年で隔日とする。③ 入室前に、手洗いと手指消毒をする。④ 返す本は、ブックトラックに一日置いておく。	・平均読書冊数1人あたり1ヶ月6冊 ・平均貸出し冊数1人あたり1ヶ月6冊	A	・「本を読もう」カード(1、2年生用)や「読書記録めざせ! 1000ページへの旅」カード(3～6年生用)の活用により、図書館で「もう1冊借りられる券」をもらう児童が増えたことなどから、昨年度に比べ、本の貸出し冊数(10月平均1人7.3冊)や読書冊数(10月平均1人18冊)が増加した。 ・5、6年生の学校評価のアンケート「読書をするのが楽しい」という設問に対し、「あてはまる」58%、「ややあてはまる」27%という結果が出ていることから、読書への関心・意欲が高まってきた。 ・感染対策も、具体的にできたことで、徹底できた。 ・課題としては、コロナ禍で制約がある中、よりよい読書環境をどう整えていくか考えていく必要がある。	・コロナ禍の中、感染対策はとられながら、よりよい読書環境が整えられるよう、創意工夫を図る。	感染対策のための制限がある中で、様々な工夫を凝らして読書の機会を確保することができたことはよかったと思う。家庭での読書週間が減ってきているような中で、読書の楽しさを味わえるような読み聞かせやサタデースクールでの親子への啓発などの工夫がしていることよいと思う。
	感染対策を踏まえた上で、図書館を運営する。						
学力の向上	読書の展開を工夫し、学習意欲を向上させる。	・各教科にてICT機器を有効に使用し、学習意欲の向上を図る。 ・新指導要領におけるプログラミング教育に関して、研修等を行い、職員の理解向上を図る。	・ICT機器の活用方法の研究を進め、実践交流を行う。 ・新指導要領におけるプログラミング教育に関して、研修等を行い、職員の理解向上を図る。	A	・各学年にて、タブレット等のICT機器を活用した授業が週平均10.5時間増えてきた。 ・プログラミング教育についての研修や、iPadについての研修など、プログラミング教育やICT機器に関する基礎的な研修を進めることができた。 ・プログラミング教育に関しては、基礎的な研修を行うことができたが、積極的に普段の授業に取り入れるには至っていない。	・タブレットの活用実践例を紹介する。 ・各学年、教科における実践例を紹介するなど、プログラミング教育を周知させる。	タブレット端末の導入のめざましい進展である。より学びに効果的な活用の方法について研究を進めてほしい。
	問題行動の未然防止、早期発見を図り、児童が楽しく過ごせる環境をつくる。 ・不登校の早期発見、対応に努め、児童が安心して通えるように支援する。 ・いじめの未然防止、早期発見を図り、児童が楽しく過ごせる環境をつくる。	・学年、生活指導部、管理職員の円滑な連絡体制の確立、校内職員の共通理解を徹底し、チームで課題解決にあたる。 ・規則正しい生活規範を確立させる。 ・児童の学校での様子を観察し、異変を感じたときには家庭訪問や電話連絡で家庭と連携を図る。 ・年間3回のいじめアンケートやセルフチェックシートを活用し、いじめの早期発見、対応に努める。	・教職員のアンケートでの、「問題行動が起きた時、組織的に対応できる体制が整っているか」の質問に肯定的な回答が90%をこえる。 ・児童アンケートにおいて、「挨拶や廊下の歩き方等、生活ルールを守っているか」の質問に肯定的な回答が90%をこえる。 ・保護者のアンケートで、「先生は生活面で子どもの様子をよく見て、適切な指導を行っているか」、「子どもは生活のルールを守っているか」の質問に肯定的な回答が90%をこえる。	・教職員のアンケートでの、「問題行動が起きた時、組織的に対応できる体制が整っているか」の質問に肯定的な回答が90%をこえる。 ・児童アンケートで、「先生は生活面で子どもの様子をよく見て適切な指導を行っているか」、「子どもは生活のルールを守っているか」の質問に肯定的な回答が90%をこえていた。 ・保護者アンケートで、「先生は生活面で子どもの様子をよく見て適切な指導を行っているか」、「子どもは生活のルールを守っているか」の質問に肯定的な回答が90%をこえていた。 ・児童アンケートで、「挨拶や廊下の歩き方等、生活ルールを守っているか」の肯定的な回答が88%であった。 ・遅刻する児童が多い。	A	・問題行動が起きたときに、すぐ指定場所へ詳細を入れ、職員でデータを共有できるようにする。 ・各校内連携を強化するとともに、カウンセラーやSSWなどの専門機関とも情報を共有し、対応していく。 ・いじめ対策や指導の仕方を共通理解し、一貫した対応に努める。また、保護者と丁寧な情報を共有し、問題解決を図る。 ・道徳部とも連携し、いじめや差別について教材の中で考える機会を設定する。 ・学校運営や長期休みのくらしなどで、児童や保護者に対して啓発を行っている。	不登校傾向児童への取り組みは、非常に有効でありぜひ継続してほしい。ただし、人材確保が必要で有り課題である。学生サポーターや地域人材からの協力者を募ることに、検討する必要がある。学校では問題行動等の起こった時に、組織的に迅速、正しい対応に努めている。教職員の異動があったり若い教職員が増えればこの体制をひきついでほしい。挨拶や廊下の歩き方等のルールを守ることで課題であることは、残念である。保護者や地域も協力して、子どもたちに明るく声をかけ、見守る体制を作るように策を考える必要がある。

豊かな心・健やかな体	体力の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・自ら進んで体力を向上させようとする児童を育てる。 ・学習のはじめに、基礎体力を高めるための運動を取り入れる。低学年のうちから、多様な運動を段階的に経験できるように、年間カリキュラムを立てる。 ・年間カリキュラムを作る際に、伊丹小学校のスポーツテストの結果を考慮し、投力に欠点が見られたため、投力を上げるために系統性を持たせた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・単元に合った力を身につけていくことで、結果としてスポーツテストの指標が1ポイント向上する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・5年男子のスポーツテストの記録は54.29点で、全国平均値を上回った。一方、毎年課題として学がソフトボール投げ、20mシャトルランの記録は全国平均値を大きく下回った。 ・5年女子のスポーツテストの記録は54.39点で、全国平均値を下回った。とりわけ、毎年課題として学がソフトボール投げ、20mシャトルランの記録は比較的大きく下回った。 ・男女ともに、特に下位にあるのが、ソフトボール投げ・20mシャトルランの2種目であった。 ・H30年度の反省より、ソフトボール投げを強化するカリキュラムを組んだ結果少し改善され、休み時間に遊ぶ児童が増えつつある。やはり、遊びの日常化が関係しているようである。また、R2年度の3学期には手前を使って遊べるドッジビーの導入も試み、それを使って遊ぶ児童が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一昨年度から継続して、低学年のうちにも多様な運動を、段階的に経験させていくことで、技能的に向上させるとともに、運動嫌いを増やさないようにする。そうすることで、遊びの日常化につながれるようにしていく。 ・ボール投げについても一昨年度から継続して、低学年から段階的に身につけさせたい技能を明確にし、指導にあたるように年間カリキュラムに示す。 ・授業開始時の5分程度の時間を使って、単元に合わせて体力を高められるような運動を取り入れていく。 ・今後もドッジビーのクラス配布は続けていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校の運動場以外でのびのびと遊ぶ場所が少ない。水曜日の放課後の校庭開放も活用して保護者の目のある遊ぶ機会を確保したい。ドッジビーなど、楽しく安全に遊ぶことの工夫を今後も子どもたちに働きかけてほしい。
	豊かな心を育む 道徳教育・情操教育の推進	<ul style="list-style-type: none"> ・道徳的価値について学び、道徳実践力を育成する。 ・新たな教材を取り入れたり、入れ替えたりするなど、子どもの実情に応じたカリキュラムの更新を行い、内容項目のバランスが取れたカリキュラムを編成する。 ・年間行事計画の策定段階で現行カリキュラムとの照らし合わせを行い、年度当初の段階で教材の差し替えや実施時期の入れ替えなどを検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各学年に「体育ファイル」をつくり、その年度で作成・使用した資料や学習カード・ワークシート等を、学年ごとに集約し、次年度へ申し送ることで、伊丹小学校での実践を積み上げていく。 ・今年度までは紙面で作成したが、来年度以降はデータ化する。 ・アンケートにおいて「体を動かすことが楽しい」と回答した児童が80%以上になる。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・実践状況と子どもの実情をもとに教材の一部を見直し、カリキュラムを編成することができた。 ・他教科の各教科の時期、特別活動、学校行事等の時期に関連付けて、その時期に合った内容項目の授業を実施することができ、さらにより相乗的な効果をねらった実践がみられるようになった。 ・多くのクラスで1日のめあてを設定し、終わりの会で振り返る時間を設けていた。また、自他の良さを見つめ合う場を設定することで、自尊感情を高めるとともに、自己を見つめる機会を持つことができた。しかし、学校評価の「自分にはよいところがある」は、76%(5.6年)と昨年と変わらず低い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学期ごとに内容項目が偏らないように編成する。 ・副読本の活用で、どの教材が他教科との関連や子どもの実情に最適か検討する。 ・月ごとや学期ごとに教材の実施時期が適切であったか検討する。 ・日々の生活の中で、道徳科と他の教材、特別活動、学校行事との関連を教師が意識し、子どもに道徳的価値の良さを伝えていく。 ・道徳的価値についての学びをさらに深めるために、生活の中だけでなく、教材の中でも自己を見つめ、自分の成長を自覚させる時間を設定していく。 ・教師が道徳的価値についてさらに理解を深め、授業展開や発問を工夫していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・道徳的価値観や行動については、家庭の影響が大きい。道徳的教科書や副読本を持ち帰り、親子で読んで話し合うなどの機会をつくることもしてほしい。 ・また、サタデースクールや地域行事等の親子で参加する行事の機会に、保護者の協力体制やつながりをつくるように、PTAや自治協議会でも働きかける。 ・保護者の行動を子供は学ぶので、明るいつながりができるように様々な機会を使って地域ぐるみで啓発していきたい。
	開かれ信頼される学校園	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的な情報収集と情報発信に努める。 ・学校HP、学校通信「いたみっ子」や掲示板等を活用して児童や教育活動の様子を発信する。 ・学校運営協議会の充実する。 ・サタデースクールやスポーツ21、自治協子ども部など家庭、地域と連携した行事へ参加する。 ・災害による休校等の情報を発信する。 ・日頃の様子についてホームページを通して情報発信する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・月10回の更新 ・学校通信を年間20号以上発行 ・季節に応じた動きのある掲示板の作成 ・学校運営協議会の年5回開催及び教職員との懇談会の実施 ・一人1回以上の参加 ・休校や学級閉鎖等の学校情報を発信する。 ・ホームページの更新頻度については各学年2回以上を維持する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・更新回数を増やし、平日毎日HPを更新した。コロナ禍で来校の機会が少ない保護者に日々の子どもたちの活動の様子を知らせることで、少しでも安心や理解につなげることができた。HP閲覧回数が増え保護者や地域の方々に関わられた学校情報発信に努めた。 ・学校通信「いたみっ子」を40号(1月末現在)発行することが出来た。コロナ禍で行事の中止や変更、タブレットの急速な導入等、様々な変化がある中、ていねいに説明したり現状を伝えたりすることで、保護者や地域の方々の理解や協力につながった。 ・掲示委員会を活用して、動きのある掲示ができた。 ・学校運営協議会で年5回、学校における課題について提言をいただくことができた。しかしながら、その提言を教職員、保護者が共有することが十分にできなかった。 ・学校運営協議会委員と教職員との合同研修会をもちつながり深めることができた。 ・休校や学級閉鎖等の情報を発信することができた。 ・月2回の更新ができない学年もあった。 ・GoogleClassroomによる手紙のデジタル配信を進めることができた。職員に配信方法を周知できていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今後ともより親しみやすくわかりやすいHPになるように努め改善を重ねる。今後も幅広い情報をアップすることで、保護者や地域に伊丹小の魅力を発信し理解や協力につなげていく。 ・ミミム等を活用して、紙ベースでの発行・HPへのアップ・グループクラスルームへの添付配信の周知に努める。 ・学校運営協議会委員と教職員が意見交換する機会を設けることで教職員と課題を共有する。 ・また、PTA、自治協議会、その他ボランティア組織との連携のあり方を情報共有し、社会が開かれた学校づくりに努める。 ・業務改善を考えながら、地域とのつながりを大切にし、積極的な参加を呼びかける。 ・月の前半と後半で更新の呼びかけを行う。 ・担当が中心となって、根気強く周知していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大きく社会も学校現場も変改している時なので、よりわかりやすく学校の情報を発信し、学校と家庭と地域がつながり、協働して子供たちの育ちを支えることができるように努めてほしい。 ・学校通信やPTA、自治協議会等でも学校のHPを見るように啓発していく。

学校運営協議会委員評価

1 家庭教育について
 自尊感情を向上させ生きる力を育てるためには、「ほめる」ことが大事である。親も親として学び、成長しなければならぬ。親も成長する機会があればよい。家庭と学校と一緒に子どもを育てていかなければならない。自分さえよければという考えになりがちだが、子どもの成長には地域や学校、保護者どうしのつながりが大切である。課題である「読書」も「廊下を歩くなどのルールを守ること」も、家庭で育てることが大事である。

2 自尊感情向上について
 認められる経験が大事である。幼稚園でも自分で考えて行動する力が弱いと思う。自分たちで進める学びを経験させることや、そんな活動の中で友だちのよいところを見つけたり褒められたりする経験が大事。そうしたチャンスをつくるのが大事。担任からの褒め言葉、1つでも言い続けられるとその言葉が「宝のこぼれ」になる。家庭でも同様である。

3 問題行動や不登校について
 しっかりと向き合うことが必要である。関係機関とも連携しているがそれを今後も大切にしていきたい。

次年度にむけた重点的な改善点
 時代が大きく変わっているので、固定観念にしばられてはいけない。アフターコロナに子どもたちに必要な力を見極めなければならない。園に応じたきめ細やかな対応や学びを保障するために、ていねいに向き合っていきたい。また、低学年からの「書き力」をおろそかにしてはならない。情報は検索さえすれば簡単に手に入るが、それを自分の考えだと思ってしまうのは危険。自分の考えを書き力を育てなければならない。また、タブレット等だけでなく、自分の手で本を探すプロセスも大事に育ててほしい。